

# オンライン環境における スピード・デーティング実験構築の試み —オンライン実施によるメリットと検討課題—

鬼頭 美江 ・ 山田 順子 ・ 犬飼 佳吾

## はじめに

恋愛関係に関する研究は、主に関係の形成段階と維持段階に焦点を当てて行われてきた。なかでも恋愛関係の形成段階に関する研究は印象形成や対人魅力の分野で扱われてきたが、架空のパートナーを対象とした場面想定法を用いることが多かった。架空のパートナーに関する情報をシナリオなどで提示し、パートナーの魅力度を評価させる手法は、魅力度を規定する要因を実験者側が操作できるという点においては妥当性の高い研究と言える。一方で、架空のパートナーに対する評価が、現実のパートナー選択場面における評価と一貫しているとは限らない。このため、より現実的なパートナー選択や関係形成の場面における検討が長年の課題となっていた。これに対し、近年、新たに注目されているのが、スピード・デーティングである(Finkel, Eastwick, & Matthews 2007)。

スピード・デーティングは、実際に自治体や民間企業等がパートナーとの出会いを求める人々に対して提供する結婚支援サービスでも用いられる手法であり、恋愛関係の形成場面を実験室で再現することで、人々の行動や心理過程を観察し、検討することを可能にする。これまでスピード・デーティングを用いた様々な研究が行われてきたが、それらはいずれも実際に参加者同士が直接対面する環境を前提とした

ものであった(Asendorpf, Penke, & Back 2011; Finkel et al. 2007; Kurzban & Weeden 2005)。一方で、通信技術の発達とともに出会いのチャンネルは多様化しており、実社会でパートナーを求める人々が利用する出会いサービスには、マッチングアプリや婚活サイトなど、インターネットやスマートフォンなどのネットワーク機器を活用したものが増加している。そこで本稿では、まず従来行われてきたスピード・デーティングの概要を述べた上で、オンライン環境でのスピード・デーティング実施に際しての実験方法について報告し、スピード・デーティングをオンラインで実施することの利点と実施の際に検討すべき課題について考察する。

## 1 対人関係の研究法としてのスピード・デーティング

スピード・デーティング<sup>(1)</sup>は、複数の男女による短時間の会話を繰り返す形式で行われる(Finkel et al. 2007)。所用時間や人数などは実験によって異なるものの、共通の手続きに従って実施される。実験には男女各5～20名が参加し、それぞれの異性と1対1で3分程度の短い対話を行う。対話後にそれぞれの異性に対する魅力度評価を行い、全ての異性との対話が終了した後、連絡先を交換しても良いと思う異性を選択する。相互選択が成立したペアはマッチン

グ成立となり、再度 2 人で話す時間が設けられ、希望に応じて連絡先を交換することができる。実験後に連絡を取るかどうかは参加者の任意であり、実験後に連絡をしたかどうかは調査対象となることもある。

従来の質問紙研究と比較したスピード・デーティング実験の利点は次の通りである。第一に、場面想定法を用いた質問紙研究と違い、現実の恋愛関係形成場面に近似した生態学的妥当性の高さである。スピード・デーティングは、研究においてのみならず自治体や民間企業が実施する婚活イベントでも用いられており、実際の関係形成場面を反映していると言える。第二に、リッチなペアデータを収集できる点である。スピード・デーティングでは実際の二者間の相互作用を対象とするため、対人魅力やマッチング成立について、各個人の特性の影響に加えて、それぞれのペア独自の効果についても検証可能である。質問紙による場面想定法など、ペアの 1 人のみを対象とした調査では、こうした複雑な影響過程を明らかにすることは難しい。

本研究は当初、対面でのスピード・デーティング実験において外見情報の開示時点が対人魅力に与える影響を検討する予定であった。しかしながら、COVID-19感染拡大の影響により対面での実験実施が困難となり、やむを得ずオンライン上で実験状況を構成し実施することとなった。オンライン環境でのスピード・デーティングの実施は前例がなく、トラブルも生じたが、オンライン実験特有のメリットや今後の実験に向けての課題を整理する機会となった。コロナ禍において、マッチングアプリなどインターネットを介した出会いの認知度が上がるほか(伊藤 2020)、自治体・民間企業もオンラインでの婚活支援イベントを企画・実施するようになった。こうした参加者側のオンラインでの出会い場面に対する認知度の高まりに加え、オ

ンライン環境での実験実施には研究上のメリットも多い。例えば、オンラインのスピード・デーティングの実施には、空間的制約や時間的制約が少なく、大規模な会場の準備等の必要性が低いほか、参加にかかる時間的コストも削減することができる。またオンライン環境であるからこそ、対面ではできない実験操作が可能になる(詳細は「3 オンラインでの実施によるメリット」参照)。そこで、当初の研究計画の遂行が困難であるコロナ禍の状況で、国内での実施例がないオンライン環境でのスピード・デーティング実験を試みた。以下では、筆者らが実施したオンラインでのスピード・デーティング実験の概要を報告し、課題と今後の実施に向けての展望について論じる。

## 2 オンライン上で実施したスピード・デーティング実験の概要

本章では、2020年12月～2021年2月に筆者らがオンラインで実施したスピード・デーティング実験の方法事例を紹介する。

### (1) 参加者

参加者は、明治学院大学実験経済学研究室における実験参加登録者リストにて募集した。当該実験参加登録者リストには、明治学院大学の学生を中心に、実験参加に関心のある大学生が含まれている。本実験への参加募集にあたり、本実験の概要、所要時間、参加条件、注意事項、問合せ先等を実験参加登録者へメールで送信し、参加希望者は登録サイトへアクセスし必要情報を入力して登録を行った。なお、本実験の参加条件は、以下の通りであった。

1. 明治学院大学の学生であること
2. 恋愛対象が異性であり、現在交際相手がいないこと

3. 実験当日、パソコンとスマートフォンの両方を使用可能であること
4. パソコンでマイクを使用できること
5. 自宅などの静かな環境、かつインターネットの接続状況が安定している場所から参加可能であること

最終的な実験参加者は、男女54名(男性28名、女性26名;平均年齢21.5歳、 $SD=1.02$ )であった。参加登録状況等のばらつきにより、各セッションの参加者は4~10名となった。参加者には、参加報酬として謝礼が支払われた。

## (2) 手続き

参加登録をした参加者には、インターネット上に設置した事前質問紙のURLを送り、実験日の1週間前から前日までに回答するよう求めた。実験前日には、1)日時のリマインダ、2)実験に使用するZoomとSpatialChatのアクセス情報(ZoomおよびSpatialChatの概要については、「(3)オンライン実験プラットフォーム」参照)、および3)設定方法の説明を当日案内としてメールで送付した。

実験当日の流れを図1に示した。まず、参加者はスマートフォンから、指定されたZoomルー

ムにアクセスした。Zoomには待機室を設定し、参加者を1名ずつ待機室からルームへ案内し、個別に本人確認を行った。全員の本人確認終了後、パソコンを使用してSpatialChatにログインするよう求めた。以降、実験全体の進行にかかわるインストラクションはZoomにて行い、異性との対話はSpatialChatにて行った。

実験開始後、参加者はSpatialChat上で異性と3分間ずつ対話を行った。なお、男女の参加人数が同数ではなかったセッションでは、対話相手がいない場合、そのまま3分間待機するよう指示した。対話開始時、各参加者には、ウェブ質問紙プラットフォーム(Qualtrics)を用いて各対話相手のプロフィールを提示した。各対話の後、対話相手である異性についての魅力度評価などの質問項目に回答するよう求めた。回答が終了した後、次の異性との対話を開始した。各セッションに参加していた異性全員と対話した後、2巡目として再度異性全員との対話機会を設けた。2巡目の対話終了後、対話相手の中で連絡先を交換しても良いと思う異性を選択する項目を含めた事後質問紙への回答を求めた。連絡先を交換しても良いと思う異性については第3希望まで挙げてもらい、第3希望までの中で相互選択に至った参加者同士をマッチング成立

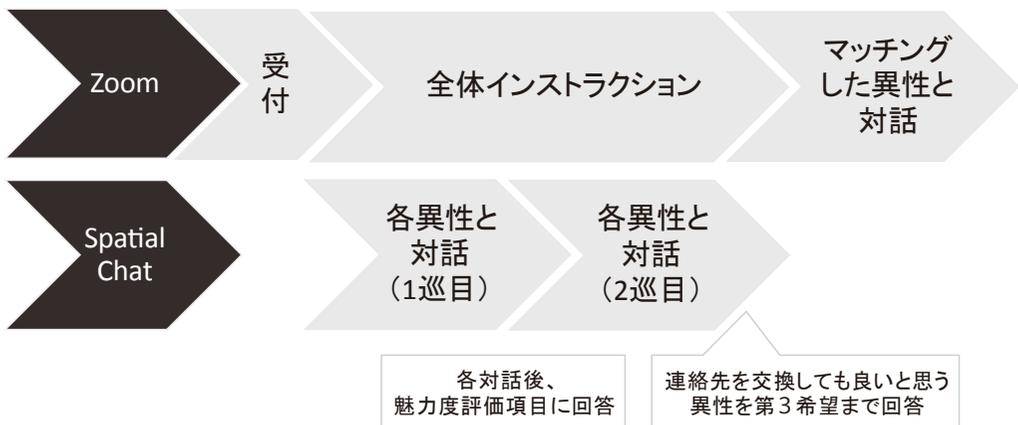


図1 実験当日の流れ

とし、マッチングしたペアについてはZoomのブレイクアウトルームで再度対話可能とした。

### (3) オンライン実験プラットフォーム

本実験では、オンラインでのスピード・デーティング実施に際して、Zoom、SpatialChat、Qualtricsを利用した。参加者に送付した当日案内メールでは、ZoomとQualtricsについてはスマートフォン、SpatialChatについてはパソコンからアクセスするよう指示した。それぞれのプラットフォームの概要や実験のどの場面で使用したのかを以下に述べる。

#### 1) Zoom

実験全体の教示は、オンライン会議用のビデオチャットアプリケーションであるZoomを用いて行った。パソコンやタブレット等を介した複数人でのビデオ通話が可能で、ビデオチャット内で別のルームを作成することで個別にビデオ通話を行うこともできる。

実験開始15分前にZoomルームを開室し、各参加者に対して個別に受付を行った。実験全体の指示はZoomを介して行うため、実験の開

始から終了までスマートフォンでZoomのアプリを常に開いておくよう求めた。実験中、SpatialChatへのログイン、異性との対話開始・終了、質問紙への回答などの教示はすべてZoomを介して口頭で実施した。スピード・デーティング終了後には、マッチングの成立したペアを対象に、ペアごとにブレイクアウトルームを設定し、1対1での対話機会を提供した。

#### 2) SpatialChat

スピード・デーティングの実施には、ブラウザ上で機能するオンライン会議システムであるSpatialChat(<https://spatial.chat/>)を用いた。実験に使用したSpatialChatの背景画像を図2に示した。参加者がSpatialChatにログインすると、自身のアバターが画面上に表示される。アバターはマウスで画面上を移動させることが可能で、参加者は実験者の指示に従いアバターを操作した。セッション開始時点では、参加者は自身のID番号の横に設置された椅子のイラスト(男性：円の内側、女性：円の外側)の場所へ移動するよう指示された。SpatialChatにはアバターの距離に応じた会話機能があり、自分と

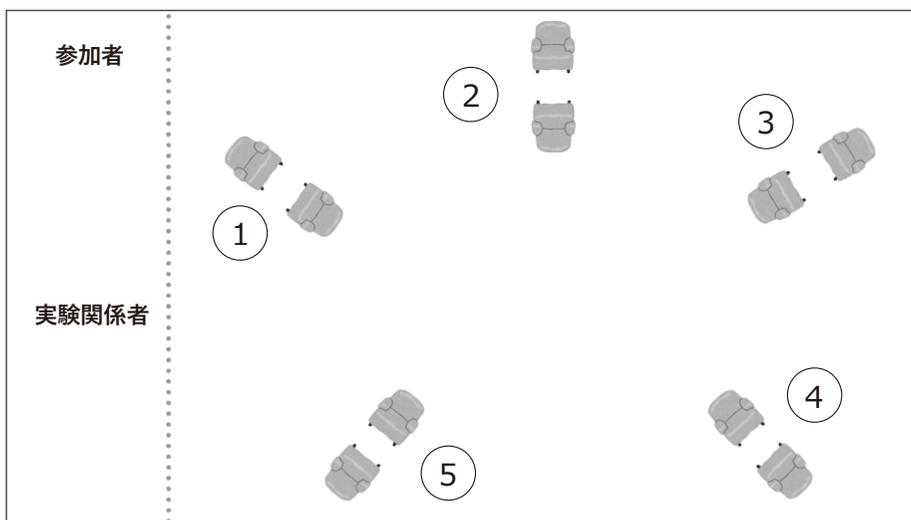


図2 SpatialChatの背景画像

距離の近い相手とのみ対話が可能なシステムになっている。向かい合う椅子の距離では相手の声が聞こえ、その他の椅子に着席している参加者の声は聞こえないよう、背景画面内での椅子の距離を設定した。このように、SpatialChatではオフラインでの現実の対人相互作用に近い形で、非対面での会話が実現できる。

### 3) Qualtrics

対話相手のプロフィール提示およびセッション中の質問紙への回答は、オンラインアンケートシステムであるQualtrics (<https://www.qualtrics.com>)を使用した。事前に作成した質問紙のURLをZoomのチャット機能を利用して参加者へ送付することで、それぞれの参加者の回答を収集した。

## (4) 質問項目

### 1) 事前質問紙(実験日までに回答)

スピード・デーティングの当日、対話相手に提示するプロフィール内容について尋ねた。具体的な項目としては、ニックネーム、学部学科、出身都道府県、趣味、最近ハマっているもの、好きな異性のタイプ等である。参加者

の個人特性を測定するため、恋愛パートナーとしての魅力価値(Mate Value; 4項目; Edlund & Sagarin 2014)、自尊心(2項目; 箕浦・成田 2013)、性格特性尺度としてBig Five尺度の日本語版(10項目; 小塩・阿部・ピノ 2012)等を使用した。また実験参加動機について「大切な関係を求めて」「1人で寂しいから」「興味本位で」などの8項目(McClure, Lydon, Baccus, & Baldwin 2010; Spielmann et al. 2013)で尋ねた。最後に、参加者のデモグラフィック項目として性別と年齢を尋ねた。

### 2) セッション間質問紙

各異性との対話後、それぞれの対話相手に関して、外見的魅力度評価、内面的魅力度評価、関係深化意図などについて尋ねた。具体的な項目を表1に示す。

### 3) 事後質問紙

2巡目ですべての異性と対話した後、セッションに参加していたすべての異性について、もう少し話してみたいと思う順を尋ねた。さらに、連絡先を交換しても良いと思う異性を第3希望まで挙げてもらった。挙げられた第3希望

表1 セッション間質問紙で用いた項目一覧

変数名	質問項目	選択肢
魅力度	今お話しした相手の方は、魅力的だと思いますか。	0. 全く魅力的でない ~6. 非常に魅力的である
外見的魅力度	今お話しした相手の方の外見は、魅力的だと思いますか。	0. 全く魅力的でない ~6. 非常に魅力的である
内面的魅力度	今お話しした相手の方の内面は、魅力的だと思いますか。	0. 全く魅力的でない ~6. 非常に魅力的である
会話活性	今お話しした相手とは、どの程度会話が盛り上がりましたか。	0. 全く盛り上がりなかった ~6. 非常に盛り上がった
関係深化意図	現時点で、今お話しした相手の方と、このイベントの後も仲を深めてもよいと思いますか。	0. 全くそう思わない ~6. 非常にそう思う
交際意図	今、2人の交際について、どの程度想像することができますか。	0. 全く想像できない ~6. とても想像できる

までの中で、相互選択が成立した相手とのマッチングを行った。最後に、実験への参加満足度について尋ねた。

### 3 オンラインでの実施によるメリット

前章では、筆者らがオンラインで実施したスピード・デーティングの具体的な方法について記述した。本章では、こうした方法に則って実際にオンラインでのスピード・デーティングを実施した経験に基づき、研究的観点および実社会での結婚支援イベントに対する応用的観点から、オンラインでの実施に関するメリットについて述べる。

#### 1) 研究的観点から

オンラインでスピード・デーティングを実施する第一のメリットは、実施コストの低さである。特に空間的・時間的制約の小ささは、参加者の人数や居住地の制限を緩和する。対面でのスピード・デーティングの場合、参加者間の距離を保つために大規模なスペースが必要である。実験の目的によって異なるものの、スピード・デーティングは少ない場合で男女5対5、多い場合では男女20対20やそれ以上にもなる。約40名がペアごとに干渉することなく対話を行うためには相応な物理的空間が必要となる。一方、オンラインの場合は物理的空間を必要としないため、対面では難しい大規模なスピード・デーティングの実施可能性も高くなるだろう。さらに、オンラインでの実施は、対面の場合に比べて時間的コストも低い。参加者はインターネット接続が可能であれば、任意の場所から参加可能である。また会場への移動時間もかからない。このため、参加に対するハードルが下がるだけでなく、遠隔地に住む参加者を募集した実験も実施可能である。実験者にとっても、会場の設営・撤去などのコストがかからないため

実験準備の時間的コストだけでなく、必要な実験者の数といった人的コストも少なく済むため実験実施のハードルが下がるだろう。当然ながら使用するプラットフォームの準備や設定などは必要だが、一度設定すれば繰り返し使用できるため、準備時間は最小限で済む。それに伴い、実施に必要な実験者の人数も対面実験に比べて少ないと考えられる。

第二に、対面ではできない実験操作を可能にする点も、対人関係の実験手法として重要なメリットである。まず、参加者にカメラのオンオフを切り替えてもらうことにより、対面・非対面の操作が容易であるため、対面・非対面が対人相互作用に与える効果に関する実験には有用である。実際、本実験においても、スピード・デーティングを2巡行う際に、1巡目からカメラをオンにしてお互いの顔を見ながら対話する条件と、1巡目はカメラをオフにして音声のみで対話を行い、2巡目は顔を見ながら対話する条件を設定した。こうした条件設定により外見情報の開示時点を操作し、魅力評価やマッチングに対する外見情報の開示時点の影響について検討した。さらに、非対面でのコミュニケーションについても、音声のみ、文字のみ(e.g. チャット)など、使用モジュールを実験的に操作することが可能である。このため、コミュニケーション・モジュールによる影響を検討する研究は、対面よりもオンライン環境において実施可能性が高いだろうと考えられる。

最後に、実験者がスピード・デーティング中の参加者の動線を比較的自由にモニタリングできる点も、オンライン実施のメリットである。対面での実験実施の場合、特に参加者の多い実験では、実験環境の空間的距離が広く会場内の参加者全体の動きを観察することは難しい。例えば、他の参加者と自由に話すことのできるフリータイムのような場面で、他の参加者に話しに行く動きが全体としてどの程度あるのかを把握することは

困難だろう。これに対してオンライン環境では、パソコンのブラウザ上で実験中の全体像を俯瞰できるため、参加者の移動をモニタリングしやすい。これにより、実験者の指示以外の動きをしている参加者の把握や観察などが容易であるほか、参加者全体の動きに関するダイナミックスを観察できるため、参加者の行動や実際のマッチングに関する探索的な示唆も得られるだろう。

## 2) 結婚支援イベントに対する応用的観点から

スピード・デーティングと同様の形式を用いたイベントは自治体や民間団体による結婚支援でも実施されていることから、そうしたイベントに対する応用的観点からのメリットの検討も有用であろう。前節でも挙げたが、参加者が任意の場所から参加可能である点は、結婚支援イベントの参加者にとっても参加しやすさを高めるメリットがあるだろう。対面イベントの場合と違い会場への移動にかかる時間的・金銭的コストがかからないため、イベント参加への抵抗感が低減し、参加への動機づけを高める可能性が考えられる。また、対面でのイベントは、規模に応じて会場利用料がかかることが多い。オンラインで実施する場合、そうした会場利用料がかからないため、インターネット通信料など最低限の費用で参加することが可能である点からも、参加者の増加が見込まれるだろう。

また、空間的制約がない点は、対面ではなかなか出会うことのない相手との交流機会の提供にもつながる。地方での過疎化が問題視される中、都市部と地方に住む男女を引き合わせる「移住コン」と呼ばれるイベントも開催されている(Little Japan 2018; NPO法人芸術家の村2018)。関心のある地方への旅行を兼ねたイベントは対面で行う必要があるが、顔合わせのためのイベント参加を希望する人にとっては、オンラインでのイベント実施はより気軽に参加し

やすいだろう。

最後に、オンラインで実施した筆者らの実験では、これまで対面で行われてきたスピード・デーティングと比べて、マッチング率が高かった点を挙げておく。対面で行われた先行研究のマッチング率は11.5%(Asendorpf et al. 2011)、25.4%(鬼頭 2019)、30.0%(鬼頭 2020)などであったのに対し、本実験のマッチング率は66.7%であった。マッチングに使用する項目内容(連絡先を交換したいか vs. もう一度会いたいか)、マッチングにおける選択可能人数、および各セッションの参加人数が実験によって異なるため、単純比較による解釈には注意が必要となるが、オンラインの方が実験後も異性とコミュニケーションを取りたがる傾向が強い可能性を示唆している。

## 4 今後に向けた検討課題

オンラインでのスピード・デーティング実施には、前章で述べたような様々なメリットがある。一方で、検討課題も残されている。第一に、対面実験では発生しえないネットワークなどのトラブルの回避である。オンライン状況では、実験者が参加者の実験環境を統制することが難しい。また参加者によっては、カフェなどの公共の場から参加する可能性もある。さらに、実験に使用している機器(スマートフォン、タブレット、パソコン)の性能や使用するブラウザの種類、インターネットの回線速度や安定性などは参加者に依存している。実際に、本実験では特にマイクやカメラの不調、インターネット接続の不安定性が目立った。実験の性質上、すべての参加者が同時に次の手順へ進む必要があったため、実験を中断して対処を行わざるをえず、結果的に予定よりも実験所要時間が長引いてしまった。事前に案内メールでスマートフォンとパソコンの使い分けについて指示し、

インターネット接続が安定した場所からの参加を呼びかけたが、個々の参加者の使用デバイスやネットワーク環境を把握し、実験者側で対処するのは困難である。次善策としては、事前の接続確認機会を設ける、接続設定に関するスタッフを準備するなどの対処が必要である。

また本実験では、ZoomとSpatialChatという2つのプラットフォームを併用したことによる参加者の混乱も見られた。参加者であった明治学院大学の学生は、オンライン授業でZoomを使い慣れていたこともあり、ネットワーク環境さえ安定していればZoomでのトラブルはそれほど多くなかった。一方で、SpatialChatについては多くの参加者が初めて使用するプラットフォームであり、かつ日本語に対応していないこともあったためか、ログインやカメラ・マイクの設定に手間取った参加者が少なからずいた。現状、オンライン上でのスピード・デーティングの実施に有用だと思われるプラットフォームには、ZoomとSpatialChatの組み合わせの他に、oViceが挙げられる。プラットフォームを複数使用することによる煩雑さや混乱を防ぐためには、単一プラットフォーム内で実験が完了し、かつ参加者にとって分かりやすいシステムが有用である。結婚支援イベントへも応用可能であることを鑑みると、将来的にはオンラインで実施するスピード・デーティングに特化した環境の構築も望まれる。

さらにオンライン実験では、実験中の参加者の行動を統制しきれない点も課題として挙げられる。例えば、実験中に関係のないウェブサイトをブラウジングしたり動画視聴を行ったりなど、対面実験よりも不真面目な参加者も少なくない可能性がある。本実験においても、スピード・デーティング中は対話相手がいるため会話自体は行うものの、セッション間質問紙はほとんど未回答で提出した参加者がいた。こうした

行動は、これまで行ってきた対面実験では見られなかったものであり、実験者の目が届かないオンライン上ならではの問題と考えられる。後述の参加対象者の選定とも関連して、オンラインのスピード・デーティングでは、対面時よりもパートナー探しに対する参加動機の高い参加者が求められる。またスピード・デーティング中に実際に対話しているかどうかを確認する方法も、事前に準備が必要だろう。

最後に、参加対象者の選定および参加報酬についてである。スピード・デーティングでは、恋愛関係の形成場面を想定しているため、交際相手のいないことが参加の前提条件となる。しかし、当然ながら交際相手を求めるモチベーションの強さにばらつきがあることには注意が必要である。本実験の参加者に関しては、「大切な関係を求めて」( $M=2.33, SD=1.11$ )、「特別な相手に出会いたくて」( $M=2.26, SD=1.09$ )などのパートナー探し関連の動機に比べて、「興味本位」( $M=4.33, SD=0.81$ )、「報酬目的」(自由記述：11.48%)、「実験への関心」(自由記述：9.84%)によって参加した参加者が多かった。本実験は参加者プールを用いた実験であった都合上、謝礼を支払うことにしたが、金銭という外的なインセンティブによってパートナー探しよりも実験参加そのものに関心が高かった可能性が考えられる。これは対面でのスピード・デーティングでも同様の課題だが、実験者が参加謝礼を支払うべきか、あるいは通常の婚活支援イベントのように参加者から参加費を徴収すべきか、もしくは無料とすべきか、といった議論が続けられている(Finkel et al. 2007)。オンラインで実施する際も、同様の検討が必要である。

#### おわりに

本稿では、オンラインで実施したスピード・デーティングの実験概要を報告したうえで、オ

ンライン実施のメリットおよび今後の検討課題についてまとめた。コロナ禍の影響により、偶発的にはあるがオンラインでスピード・デーティングを実施する機会が発生した。オンラインでの実験実施は現段階では前例のない取り組みであったため、予期せぬトラブルも発生した一方、オンライン実験ならではのメリットへの気づきや、今後の実験に向けての注意事項および事前準備の必要な事項などを整理できた点を鑑みると、本実験は意義ある試みだったと言えるだろう。今後は、本稿で取り上げられた課題を検討したうえでの実験実施や結婚支援イベントへの応用が望まれる。

【注】

(1) これまで実施されたスピード・デーティング実験は、異性愛者を対象としたものであるため、本稿では異性間での恋愛関係に焦点を当てて議論する。同性間の恋愛関係を対象とした実験にも、調整を適宜加えたうえで適用可能な手法である。

【参考文献】

Asendorpf, J. B., Penke, L., & Back, M. D., 2011, From Dating to Mating to Relating: Predictors of Initial and Long-Term Outcomes of Speed-Dating in a Community Sample. *European Journal of Personality*, 25, 16-30. <https://doi.org/10.1002/per.768>

Edlund, J. E., & Sagarin, B., 2014, The Mate Value Scale. *Personality and Individual Differences*, 54, 72-77. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2014.02.005>

Finkel, E. J., Eastwick, P. W., & Matthews, J., 2007, Speed Dating as an Invaluable Tool for Studying Romantic Attraction: A Methodological Primer. *Personal Relationships*, 14, 149-166. <https://doi.org/10.1111/j.1475-6811.2006.00146.x>

伊藤南美, 2020, 「マッチングサービス・アプリの認知度は27.0%、うち利用者は57.1% 緊急事態宣言発令時期にマッチングサービス・アプリを始めた理由『新しい出会いが欲し

いから』」([https://mmdlabo.jp/investigation/detail\\_1887.html](https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1887.html)) 2021.9.19閲覧。

鬼頭美江, 2019, 「外見と内的特性は恋人としての魅力評価を予測するのか?—Speed Datingを用いた検討—」『日本心理学会第83回大会 公募シンポジウム:「出会い」創出をめぐる心理学の持つ可能性と社会的期待: Speed Dating研究の展開』。

鬼頭美江, 2020, 「Speed Datingにおける成功率を上げるシステムの探索—類似性による事前ペアリングと告知の効果—」『日本心理学会第84回大会 公募シンポジウム: Speed Datingを用いた「出会い」研究の展開』。

Kurzban, R., & Weeden, J., 2005, HurryDate: Mate preferences in action. *Evolution and Human Behavior*, 26, 227-244. <https://doi.org/10.1016/j.evolhumbehav.2004.08.012>

Little Japan, 2018, 「『移住コン』地方へのかかわりに興味を持つ人同士をつなぐ、新たな出会いの場づくりを始めます」(<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000007.000024445.html>) 2021.9.13 閲覧。

McClure, M. J., Lydon, J. E., Baccus, J. R., & Baldwin, M. W., 2010, A Signal Detection Analysis of Chronic Attachment Anxiety at Speed Dating: Being Unpopular Is Only the First Part of the Problem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 36, 1024-1036. <https://doi.org/10.1177/0146167210374238>

箕浦有希久・成田健一, 2013, 「2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討」『感情心理学研究』21, 37-45. <https://doi.org/10.4092/jsre.21.37>

NPO法人芸術家の村, 2018, 「行ってみよう、移住コン」(<https://ijyucon.com/>) 2021.9.13閲覧。

小塩真司・阿部晋吾・ピノ, C., 2012, 「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」『パーソナリティ研究』21, 40-52. <https://doi.org/10.2132/personality.21.40>

Spielmann, S. S., MacDonald, G., Maxwell, J. A., Joel, S., Peragine, D., Muise, A., & Impett, E. A., 2013, Settling for Less out of Fear of Being Single. *Journal of Personality and Social Psychology*, 105, 1049-73. <https://doi.org/10.1037/a0034628>